栃木県農村部における淡水魚名の多様化要因と 継承の可能性

Clarification of Diversification Factors and succession of Dialectal Names of Freshwater Fish
in Rural Areas in Tochigi Prefecture.

守山 拓弥^{1*} 守山 弘²

Takumi MORIYAMA^{1*} Hiroshi MORIYAMA²

Abstract : In 2010, the Secretariat of the Convention on Biological Diversity (SCBD) and UNESCO initiated a joint project on Biocultural Diversity. Dialects are an important factor in conveying the culture of a region. However, the number of dialects has been decreasing in recent years. It is important to preserve the dialect names of freshwater fish as one of the measures to maintain Biocultural Diversity in paddy fields. This study examines the factors that contribute to the diversity of dialect names for freshwater fish. We investigated the dialect names of freshwater fish in the rural areas of Tochigi Prefecture. In this study, fish names were categorized into Category I, Category II, and Category III. Then, the fish names were divided into basic and modified parts. In addition, the basic part was divided into central and vernacular dialects. The results showed that fish names for fish species with vernacular dialect were abundant. Furthermore, vernacular languages were found to vary from river basins. The central dialect was found to have diversified modifiers. The diversification of modifiers was related to the suitability of the fish for eating. In many species of fish, the dialect names of fish were passed on to rural children. We discussed the important role of environmental education systems and people's participatory survey on paddy water creatures in the future to pass on the names of fish dialects to the next generation.

Keywords : *Freshwater fish, Dialect names, Multi-functionality Payment Grant, Environmental Education, People's Participatory Survey on Paddy Waters Creatures*

キーワード：淡水魚，魚名，多面的機能支払，環境教育，住民参加型の生きものの調査

1. はじめに

生物多様性条約は現在 196 カ国が批准している¹⁾。農業や水田の生物多様性に目を向けると、我が国では第 10 回締約国会議 (COP10) で「SATOYAMA イニシアチブ」が提唱され、水田を含む農地や人工林、二次林、ため池、草原などから構成される二次的自然地域を保全することの重要性が指摘された²⁾。また、湿地を保全するための国際条約 (ラムサール条約) において、「水田決議」が全会一致で採決され、水田が生物多様性の豊かな湿地生態系を支えていることが、国際的に支持された考え方となっている³⁾。

一方、近年生物多様性と文化に関する議論が盛んになりつつある。2010 年に生物多様性条約事務局 (SCBD) と国際連合教育科学文化機関 (UNESCO) が生物多様性と文化多様性とを関連付けた概念である生物文化多様性 (Biocultural Diversity) の共同プロジェクトを発足させ⁴⁾、新たな潮流となっている。武内⁵⁾は、国際連合食糧農業

機関 (FAO) による伝統的農業システム認定制度「世界農業遺産 (GIAHS)」において、農業生物多様性が生物文化多様性の中心的な概念であることを指摘している。水田水域における生物多様性に関係する文化としては、水田や水路に生息する魚を獲り食べる漁撈文化が知られている^{6), 7)}。安室⁸⁾は、農民たちにとって重要な漁撈空間が水田用水系であり、そうしたところでの漁撈を包括して水田漁撈と呼ぶことを提唱している。以上を踏まえると、我が国の水田水域が広がる農村部における生物文化多様性を明らかにするには、水田水域の魚類と人との関わりを明らかにすることが重要であることが見えてくる。

地域の文化を伝える要素として重要なものに方言がある。文化庁の国語審議会⁹⁾は、「方言は地域の文化を伝え」るものとし、佐藤¹⁰⁾は、方言は地域のアイデンティティーであると指摘している。しかし、近年方言の減少が指摘されており¹⁰⁾、UNESCO は、日本においても 8 言語・方言等が消滅の危機にあることを示し¹¹⁾、さらに生物の方言名は衰退が著しいことも指摘されている¹⁰⁾。

¹宇都宮大学農学部 ²農業環境技術研究所名誉研究員

¹Faculty of Agriculture Utsunomiya University ²Honorary Fellow of National Institute for Agro-Environmental Sciences

Corresponding Author*: t-moriyama@cc.utsunomiya-u.ac.jp

続いて、魚類の方言名（以下、魚名と記す）についてみる。高橋¹²⁾は、身のまわりの自然を名づけ、分類するという認識のあり方は、民俗知識の形式的な一部分としている。洪澤は、「魚名は、人と魚との交渉の結果成立した社会的所産」と指摘した¹³⁾。また鈴野¹⁴⁾は、イワナ、ヤマメ、アマゴを対象に優勢魚名を共有する地域を「魚名文化圏」とし、日本列島の地域区分のひとつとなる可能性を指摘した。このように魚名は人と生きものの関わりの産物として着目されている。しかし、人と魚、あるいは魚名を使い情報を伝達する人と人との間で、どのようにして多様な魚名が形作られたかは不明である。

今後、水田水域における豊かな生物文化多様性の重要な要素であると考えられる魚名を保つためには、はじめに人と魚との関わりの所産である魚名が、どのようにして多様となってきたのかを明らかにすることが重要である。これにより、地域に残された魚名を守る意義が明確になると考えられる。さらに、こうした魚名を次世代に残すことが望まれる。本研究では、こうした課題意識のもと、多様な魚名が生じた要因を明らかにし、さらに多様性が低下する要因や地域に残された魚名の次世代への継承の可能性を検討することを目的とした。

2. 研究の方法

2.1 研究の構成

方言が地域により異なることは広く知られる。古くは、柳田國男が「蝸牛考」で方言の地理的分布の様相を論じている¹⁵⁾。戦後では、国立国語研究所（文部省・文化庁）が1957～65年にかけ全国調査を実施し、全国の方言の違いや地域ごとの類似性などについての報告がなされてきた^{16), 17), 10)}。

魚名の多様化と魚の利用との関係を指摘する研究もある。西端¹⁸⁾は、琵琶湖沿岸漁村では利益の大きい魚種で漁民の用いる魚名の下位分類が多くなることを報告している。また、高橋¹²⁾は、サンゴ礁地形を生業の場とする漁師が、魚の利用にかかわる視点から漁獲対象である魚を命名していることを報告している。

以上の先行研究より、本研究では魚名の多様化の要因として検討を要する点を、第一に魚名の分布、第二に対象魚の利用に求め、両者との関係を調べる研究構成とした。対象地域は栃木県内全域とし、アンケート調査により魚名を集積した。なお、明治期に魚名の統一化が進んだと指摘されるメダカについては戦前に栃木県内で行われた調査で報告された魚名を用いた。さらに、魚名の構造を基に分解し、部位ごとに魚名を整理した。分布については、整理した魚名の分布を栃木県内の流域ごとに整

理し比較検討することを目指した。対象魚の利用については、漁獲した魚の自家消費や販売といった消費対象者の視点から検討することを目指した。さらに、地域に残された魚名の次世代への継承の可能性と方策を検討した。

2.2 アンケート調査方法

2.2.1 アンケート対象および配布と回収方法

アンケートを作成し、栃木県内の多面的機能支払活動に取り組む組織（以下、多面組織と略記する）を対象にアンケート調査を2回実施した。多面的機能支払とは、農村の持つ多面的機能を支える地域活動を支援することを目的とした農林水産省の事業である¹⁹⁾。多面組織は、様々な主体から成り立つが、基本的に対象地の農業者が核となる。そのため、同組織にアンケートすることで、農村集落における情報を集積できると考えた。

1回目は2017年2月26日に栃木県内で実施された多面的機能支払活動の講習会に参加した参加者812人にアンケート調査票を配布し同日会場でアンケート調査票を回収した。同講習会の講演内において、スライドを用いてアンケートの主旨および回答方法、対象水域が水田水域であること、アンケートの質問項目などについて説明した。アンケート調査票には記入者の居住集落の記述項目を設け集落別に取りまとめた。同一の集落から複数回答があった場合、異なる魚名であればすべて集計した。

2回目の調査は、栃木県内の多面組織のほぼすべてとなる520団体を対象に実施した。2017年の6月に栃木県内5ヶ所で実施され、栃木県内の多面組織のほぼすべてとなる520団体の代表者が参加した「多面的機能支払説明会」でアンケートについてスライドを用いて対象水域が水田水域であること、アンケートの質問項目などについて説明したうえで、説明会会場で組織毎にアンケート調査票を配布した。回収は配布した返信用封筒を用い郵送により行った。さらに、アンケート調査票を配る際には「田んぼの魚とりアンケート調査へのご協力のお願い」と題した調査の説明文を1枚配布用封筒に封入し、アンケートの主旨や対象水域が説明会に参加していなかった対象者（各団体の代表者以外の構成員）へも伝わるよう努めた。多面組織が複数集落から構成される場合は、集落数分のアンケートを各組織に配布した。

2.2.2 アンケート項目

アンケート調査票は、魚種別に調査項目を記す形式とした。先行して栃木県宇都宮市内で実施されたヒアリング調査²⁰⁾により、調査用写真図鑑の有効性が確認されたことから、アンケート調査票には各魚種のカラー写真を掲載し、誤同定を避ける工夫をした。一方、アンケート調査票の分量は回答者の労力が過度にならないよう1枚

(裏表)としたため、カラー写真を掲載すると掲載可能魚種が限られたことから紙面のスペース上掲載可能な種数(16種および2分類群毎)を調査対象種とした。調査対象種は、ヒアリング調査²⁰⁾で出現集落が多く、かつ水田水域を主な生息場とする16種および2分類群とした(Table 1)。現在栃木県内に生息するウナギの標準和名はニホンウナギ、シマドジョウはヒガシシマドジョウ、カマツカはスナゴカマツカ、ドジョウはドジョウとキタドジョウが混在、となるが²¹⁾、アンケート対象者へ浸透している標準和名を用いるため、対象魚の標準和名は「とちぎの魚類」²²⁾によることとした。

設問項目は、前述の16種および2分類群について、各集落での①昔(昭和30年代)の生息情報(いた、いなかった、わからないの3択式)、②魚名(自由記述式)、③利用方法(自家消費した、販売した、利用していない)、④子供が用いる呼称を選択もしくは記述できるようにした。「子供が用いる呼称」の設問では、「子供達は、地元の名前と、図鑑に書かれている名前のどちらを使っていますか?」という質問項目と、「地元の名前、図鑑の名前、両方、わからない」という選択肢を設けた。①および②については、両調査で設問したが、④は1回目のアンケート調査時に、③は2回目のアンケート調査票にのみ実施した。

2.3 過去の調査資料による補足

メダカについて、澁澤¹³⁾は「明治初年以来の初等教科書(国定教科書)」が「全国民にメダカの魚名を教え」、そのことがメダカの魚名の統一につながったことを報告している。そこで初等教科書(国定教科書)が用い始められた教育勅語下布時(明治23(1890)年)以前の魚名が残されると考えられた資料として「メダカ乃方言」²³⁾を用いた。栃木県での同調査は1937-39年に行われていて、その時に50代以上の人は教育勅語下布時には小学生適齢期以上になっており、同資料の調査時には初等教科書(国定教科書)による影響を受けていないメダカの魚名が残されていると考え、アンケートの結果をメダカA、「メダカ乃方言」から、他魚種との混同と思われる呼称を除く56呼称をメダカBとして整理した。

2.4 魚名の分類

2.4.1 魚名の類型化

澁澤¹³⁾は、「魚名の研究」において、「タイ、コイ、アユ、アラ、(中略)サッパ等は一見意味の通じない魚名で、(中略)これらの魚名を便宜上一次魚名として整理」した。さらに、「一次的魚名を根幹として、各種の形容詞を、多くの場合前置して、魚族の種類を更に細かく類

別したと見なさるべき魚名」を二次的魚名とした。本研究では、澁澤¹³⁾の整理した一次的魚名と二次的魚名という概念を基に、魚名を分類した。ただし、一次的魚名と二次的魚名には、澁澤¹³⁾自身が記している「一見意味のわかる魚名」が含まれていない。そこで、本研究では澁澤¹³⁾が一次的魚名とした魚名を類型Ⅰ、二次的魚名とした魚名を類型Ⅱとし、澁澤¹³⁾が「一見意味のわかる魚名」としたものを類型Ⅲとした。類型Ⅱに該当する魚名には、「形容詞を、多くの場合前置」¹³⁾することから、基本部と修飾部へと魚名を分解し整理した。一方、類型Ⅰは分解できないため、魚名を分解せずにそのまま基本部として扱った。また、類型Ⅲについては、例えばスナムグリ(シマドジョウの地方名)のようにスナとムグリに語としては分解することができるものの、分解すると魚名としては意味を失うことから、そのまま基本部として扱った。類型化の手順をFig.1に示す。

2.4.2 基本部の分類

基本部とし分類されるものには、ウグイ、ウナギ、オイカワ、カジカ、カマツカなど、標準和名に準ずる魚名があり、一方でイカリ、ガンガラ、ギンギョなど、標準和名には準じない方言として残されている魚名がある。そこで、本研究においては、前者は小林²⁴⁾を参照し中央語とした。後者については、中央語の対義語として地方語と定義し、両者の区分は標準和名に準ずるか否かという基準によることとした。さらに、基本部には、例えば、カジカではカジッカ、カチッカなど音韻変化により呼称が多様化している例がある。こうした類似の呼称を基本形としてまとめ、標準和名に準ずるかで中央語と地方語に分割した。

2.4.3 修飾部の分類

類型Ⅱで基本部と修飾部とに分けたが、このうち修飾部を見ると、それぞれ異なる意味を持つことがわかる。従来の魚名の分類でも、修飾部として分割はしてはいないものの、鈴野¹⁴⁾はイワナ、ヤマメ、アマゴの地方名を

Fig.1 魚名の類型化の手順
Procedure for categorizing dialect names.

分類する要素として生態的特徴、形態的特徴、生息環境、それらの複合、外来語由来などとしている。さらに沖縄の素潜り漁師の用いる魚名を研究した高橋¹²⁾は、本研究と同様に修飾語に着目し、修飾語となる語彙素を分析し、魚名の命名の際に注目される指標として、魚の体色（色彩）、模様、形態、生態的特徴をあげている。本研究では、調査により集積された魚名のうち、類型Ⅱに該当した魚名から修飾部を分離し、得られた修飾部に含まれる情報を基に修飾部を分類した。

2.5 魚名が多様化する要因の検討方法

本研究では、多様化の要因として検討を要する点として、魚名の分布と魚の利用の2点を挙げている。そこで、魚名が多様化の要因について、以下に記す2つの方法で検討した。第一に魚名を分類し抽出された基本部（中央語および地方語）について、確認された集落の分布を流域単位で集計し、各項目について分布に偏りがあるか調べた。第二に、魚の利用として漁獲した魚の自家消費率と販売率をそれぞれ用いた。以上の第一、第二の方法を踏まえ、魚名が多様化の要因を検討した。

2.6 魚名の継承の可能性と伝わりやすい条件の検討

「子供が用いる呼称」についてのアンケート結果により魚名がどの程度次世代に伝わっているか、伝わりやすい条件はなにか検討した。「地元の名前」が次世代に伝わりやすい条件を明らかにするために、魚種毎の「地元の名前もしくは地元の名前と図鑑の名前の両方を選択した割合（％）」と①栃木県内の多面組織における「生きもの調査」での対象魚種の確認組織数、②宇都宮市内の多面組織（30組織）における「生きもの調査」での捕獲個体数、の各数値との相関関係（スピアマンの順位相関係数）を調べた。なお、①は栃木県農地水多面的機能保全推進協議会のホームページ²⁵⁾上で公開されている「田んぼまわりの生きもの調査報告書」のうち、対象魚種の確認組織数が公表されている2008年から2013年の報告書を基に集計し年平均値を求めた。②は、2015年に宇都宮市内の多面組織が実施した「生きもの調査」の組織ごとの報告書（30組織分）を宇都宮市役所において閲覧のうえ対象魚種の捕獲個体数を集計した。①および②の値が大きい魚種は、現在も集落に多く生息すると考えられ、魚類の生息状況と魚名の継承との関係を明らかにするための値とし採用した。

3. 結果

3.1 アンケート調査の結果

3.1.1 アンケートの回答数と集積された魚名

1回目の調査で273名、181集落からの回答を得た。2回目の調査では111集落からの回答を得た。両アンケート調査ともに回答を得た集落が57あり、両アンケート調査を通じ合計235集落の情報が集積された。集積された魚名は16種および2分類群の合計で250種類であった。確認された魚名を **Table 1** に示す。

3.1.2 自家消費率と販売率

自家消費と販売について、2回目の調査におけるアンケート調査結果のうち「③利用方法（自家消費した、販売した、利用していない）」（111集落）を基に調査結果をまとめた。③利用項目で回答のあった集落数のうち「自家消費した」に回答があった集落数の割合を自家消費率（％）、「販売した」に回答があった集落数の割合を販売率（％）とした。調査結果を **Table 1** に記す。

3.1.3 子供が用いる呼称と生きもの調査での確認種

子供が用いる呼称について、1回目の調査結果（273名、181集落）を基に調査結果を取りまとめた。調査結果を **Fig.2** に示す。また、先に述べた①栃木県内の多面組織における「生きもの調査」における対象魚種の確認組織数、および②宇都宮市内の多面組織（30組織）における「生きもの調査（2015年）」での確認個体数の平均値、の2値についても **Fig.2** に示す。ここで示した魚種毎の①対象魚種の確認組織数、②対象魚種の確認個体数の平均値、の各数値について、地元の名前もしくは地元の名前と図鑑の名前の両方を選択した割合（％）との相関関係（スピアマンの順位相関係数）を調べた。その結果、①（ $rs=0.74$, $P<0.01$ ）と②（ $rs=0.71$, $P<0.01$ ）について、地元の名前もしくは地元の名前と図鑑の名前の両方を選択した割合（％）との間で正の相関関係が確認された。なお、①と②の両数値自体も正の相関関係が確認された（ $rs=0.89$, $P<0.01$ ）。

3.2 魚名の分類

3.2.1 魚名の類型化

Fig.1 に示した手順に従い、アンケート調査で確認された250種類の魚名を類型化した。類型化の結果を **Table 1** に記す。

3.2.2 基本部

Fig.1 のフローに従い、基本部を抽出した（**Table 2**）。続いて、確認された魚名数が多い順に調査対象である16種および2分類群を並べ、各魚名を中央語と地方語に分けて示した（**Fig.3**）。自家消費率及び販売率と中央

語及び地方語の魚名数（メダカはBを使用）との相関関係（スピアマンの順位相関係数）を調べたところ、自家消費率と地方語（ $r_s = -0.66$, $P < 0.01$ ）、販売率と地方語（ $r_s = -0.64$, $P < 0.01$ ）に有意な負の相関関係が見られたが、自家消費率及び販売率と中央語との間で有意な相関は見られなかった。また、中央語のみを持つ魚種と地方語も持つ魚種について、自家消費率と販売率とをそれぞれ比較した（Fig.4）。すると、自家消費率と販売率ともに、中央語のみを持つ魚種の方が有意に高い値となった（ウェルチのt検定, $P < 0.01$ ）。

3.2.3 修飾部

12種と2分類群で41個の修飾部が確認され、4種（ヤマメ、カジカ、ギバチ、カマツカ）では確認されなかった。また、修飾部は語彙の意味から真、偽、味、蔑称、生息環境、形態、婚姻色、体長・齢、不明に分類した。修飾部の分類結果をTable 3に記す。修飾部のうち「真」はマブナ（フナ属）、ホンザコ（ウグイ）と、それぞれ食に適した魚種となる。これに対し、「味」ではニガブナ（タナゴ亜科）やニガザコ（アブラハヤ）など、食に不適である「苦い」を意味する「ニガ」が付随する形となる。フナ属とタナゴ亜科は両者ともに体高のある魚形となっており、似た形状となっている。また、ウグイとアブラハヤも両種ともに同じく遊泳型となっている。似た体型の魚種で、両者ともに同じ中央語がもちいられる場合、両者を区別する必要が生じ、修飾部としての「真」と「味」が生じたものと考えられる。同様に、「偽」として見られたニゴイのニやニセも、同様にコイとの区別のために用いられた修飾部であると考えられる。「体長・齢」は大型のウナギである「ジネンジョウナギ」、大型のドジョウ「ライサマドジョー」、大型のナマズ「オオナマズ、サンサイ（サンザイ、サンゼイ）ナマズ」といった大型の個体につけられる場合が多く、小型の個体を表すものはウナギの幼魚「メソウナギ」のみであった。「生息環境」としては「スナ」のみが確認されたが、その多くがシマドジョウの修飾部として確認され、スナヤツメでも1例確認された。「形態」では、シマ、ゴマという模様に由来するもの、アブラという体表の触感に由来するもの、キ、キン、ギン、ギンタロウ、クロという体色に由来するもの、ヤツメという鰓孔の数に由来するもの、が確認された。「婚姻色」では、アカハラがウグイの婚姻色として確認された。一方、多くがオスの婚姻色が華美なことで知られるオイカワ、タナゴ類で見られた。両者に共通するのはオシヤラクであり、これは遊女を表す方言である²⁶⁾。婚姻色を示したオイカワ、タナゴを表すために用いられたものと考えられる。なお、「ジジ、ババ」なども、アンケート調査に書かれた回答者の

注釈などから、婚姻色や追星の出た個体を示すと考えられ「婚姻色」に分類した。また、チリメンについても、織物の一種である縮緬生地の色や凹凸した形状（シボ）と婚姻色及び追星の出たタナゴが似ていると考え「婚姻色」に含めた。さらに、「シヨンベン」や「バカ」といった対象魚の価値を低く捉えた呼称を蔑称とした。

一方、「不明」としたものには、「マンガン」、「アイソ」、「ガンガラ」、「ホトケ」、「ヒラメン」がある。「マンガン」は馬鯨であるため形態と考えられ、ドジョウでは大型の個体に「マンガン」を用いるため「体長・齢」である可能性がある。一方、ホトケドジョウにも同様の修飾部が確認されたことから、魚名の混交が起こっている可能性が排除されず、不明とした。「アイソ」は捕ることに夢中になり家族などに「愛想をつかされる」ことが語源という説²⁶⁾がある。一方で、隣接する茨城県の水戸における江戸期の史料（水戸藩『御領内産物留』²⁷⁾）に「アユソ」があるものの、同時期の栃木県内の産物帳には「アイソ」あるいは「アユソ」の記述は残されていない²⁷⁾ことから、「愛想」説が確たるものと考えられず、ここでは不明とした。鬼怒川水系を中心に県内全域に広がる「ガンガラ」もその語源となる語が推定されず「不明」とした。さらに、1例のみの確認ではあるが、「ヒラメン」について、「チリメン」と同様に織物を比喻とした婚姻色に由来する可能性もあると想定されたが、「ヒラメン」なる織物を確認できないことから婚姻色である確証を得られないため「不明」とした。

3.2.4 修飾部と自家消費率との関係

修飾部について、分類別（真、偽、味、蔑称、生息環境、形態、婚姻色、体長・齢）にそれぞれの分類を持つ魚種について、自家消費率を箱ひげ図としてFig.5に示した。修飾部の分類別にみると、真と体長・齢の自家消費率が高い値を示した。そこで、真、体長・齢をまとめて「食に適している」修飾部を持つ魚種とし、これに対し、偽、味、蔑称をまとめた「食に適していない」修飾部を持つ魚種としてそれぞれの自家消費率を比較したところ、有意な差が見られた（Fig.5、ウェルチのt検定, $P < 0.01$ ）。

4. 考察

4.1 基本部の多様化の要因

4.1.1 中央語、地方語の呼称数

中央語は調査対象とした16種および2分類群すべてで確認されたのに対し、地方語は12種および1分類群で確認され、ウナギ、フナ、ドジョウ、ナマズでは地方語は確認されなかった。また、魚名数は中央語で82個であったのに対し、地方語では約2倍となる176個で

Table 1 確認された栃木県の魚名, 利用形態, 類型
Dialect names, use patterns and classifications of freshwater fish in Tochigi Prefecture.

標準和名	学名	魚名数	自家消費率 (%)	販売率 (%)	魚名 (確認集落数) および類型 I, II, III
ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>	3	84.5	18.4	I :ウナギ(134), II :ジネンジョウウナギ(1), メソウナギ(1),
メダカ A	<i>Oryzias latipes</i>	3	5.4	0.0	I :メダカ(118), ザコ(1), II :クロメダカ(1)
ヤマメ	<i>Oncorhynchus masou masou</i>	5	88.3	3.3	I :ヤモ(57), ヤマベ(37), ヤマメ(36), ヤマンベ(1), ヤマンボ(1)
フナ属	<i>Carassius</i> spp.	6	64.4	4.4	I :フナ(142), フナッコ(1), II :ギンブナ(17), キンブナ(11), マブナ(7), キブナ(2)
ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i>	6	80.8	17.3	I :ドジョウ(131), ドジョー(3), ドジョオ(1), デラキン(1), II :マンガンドジョウ(4), ライサマドジョー(1)
ナマズ	<i>Silurus asotus</i>	6	80.0	4.7	I :ナマズ(122), トサイッコ(1), II :サンザイナマズ(4), サンサイナマズ(3), サンゼイナマズ(1), オオナマズ(1)
スナヤツメ	<i>Lethenteron reissneri</i>	9	43.2	0.0	I :ヤツメ(74), ヤズ(1), ヤズッコ(1), ヤツ(1), ヤヅメ(1), ヤツンコ(1), II :ヤツメウナギ(86), スナヤツメ(1), III :スナサビ(1)
カジカ	<i>Cottus pollux</i>	12	79.0	4.9	I :カジカ(75), カジウカー(1), カチカ(5), カチッカ(1), ドンコ(1), バカズ(1), バカッコ(1), オヤジ(1), イガリ(1), ウキンメ(1), III :バカツカ(1)
ギバチ	<i>Tachysurus tokiensis</i>	16	50.7	0.0	I :ギンギョ(109), ギバチ(7), ゲンギョ(5), ギンバチ(3), ギンバチ(3), ギギョ(3), ゲギョコ(2), ギンギョウ(2), ギギョウ(1), ギツギョ(1), キンギョ(1), ギンキョウ(1), ギータ(1), ギギ(1), ゲギョ(1), バチメ(1)
ニゴイ	<i>Hemibarbus barbus</i>	16	26.5	0.0	I :サインボ(20), サイ(19), セインボ(9), セイ(6), コイ(4), セイボ(3), サイッコ(1), セインボー(1), セリンボ(1), センボ(1), センボウ(1), II :ニゴイ(8), ニゴウ(1), ニセゴイ(1), マルタ(1), III :ネコマタギ(1)
ウグイ	<i>Tribolodon hakonensis</i>	16	78.4	9.2	I :アイソ(116), ザコ(104), ハヤ(27), ウグイ(13), マルタ(6), アイサ(1), アユソ(1), ニガッペ(1), II :ホンザコ(7), ホンバヤ(6), アイソザコ(3), アイソザコウ(1), アカハラザコ(1), III :アカハラ(23), アカッバラ(3), クチボソ(1)
シマドジョウ	<i>Cobitis biwae</i>	15	72.2	11.0	I :ドジョウ(12), スナメ(2), ババズ(1), II :シマドジョウ(13), スナドジョウ(8), スナアビ(1), III :スナサビ(114), スナハビ(24), スナハギ(4), スナモグリ(4), スナッパギ(2), スナカブリ(1), スナギッチョ(1), スナハジ(1), スナヘビ(1)
カマツカ	<i>Pseudogobio esocinus</i>	21	46.3	0.0	I :バカゾー(18), バカゾ(8), バカゾウ(2), バカゾー(2), セイリンボ(2), セリンボ(2), ダギンボ(2), セーリンボ(1), バカ(1), バカズ(1), バカズー(1), バカスカ(1), バカソ(1), バカッコ(1), バカッチョ(1), III :カマツカ(17), スナムグリ(16), カマヅカ(2), カマスカ(1), ズンムグリ(1), スナノボリ(1)
ホトケドジョウ	<i>Lefua echigonia</i>	24	48.6	4.1	I :ババスコ(69), ドジョウ(20), ドンバラ(10), ババスコ(7), ドンベ(5), ババ(4), ドンバラッコ(3), ドンブラ(3), ババッコ(2), ドンッバラ(1), ドンバラスコ(1), ドンブラコ(1), ドンブラッコ(1), ドンブラスコ(1), ドンブラッコ(1), ドンベ(1), ドンベスコ(1), ドンベラ(3), ドンベラッコ(1), バガズ(1), ババジッコ(1), ババリン(1), II :ホトケドジョウ(16), マンガンドジョウ(2)
アブラハヤ	<i>Phoxinus lagowskii</i>	25	67.6	0.0	I :ハヤ(23), ニガンベ(19), ザコ(15), ニガッペ(7), ニガ(6), ニガベ(4), イカリ(2), ザゴ(1), ザッコ(1), タナゴ(1), ダラン(1), ニガリ(1), II :アブラザコ(55), ションベンザコ(8), アブラハヤ(6), ニガザコ(2), ニガッパヤ(2), アブラザコウ(1), アブラザッコ(1), アブラタナゴ(1), アブラタラシ(1), アブラッタラシ(1), アブラッパヤ(1), アブラバヤ(1), ヤナギバヤ(1)
オイカワ	<i>Opsariichthys platypus</i>	31	56.7	0.0	I :ガンガラ(95), イカリ(16), オイカワ(12), タナゴ(10), ヤマベ(8), ザコ(7), オシヤラク(7), サッパ(2), ニガンベ(2), ハヤ(2), アカンベ(1), オイガ(1), ギンギラ(1), ニガリ(1), II :オシヤラクタナゴ(6), ジジイカリ(3), オシヤラクザコ(2), オシヤラクブナ(2), オシヤレタナゴ(2), オシヤラクサッパ(1), ガンガラタナゴ(1), ジジンベイカリ(1), ジンベイイカリ(1), ダダボイカリ(1), バカッパヤ(1), バカハヤ(1), ババイカリ(1), III :ネコマタギ(5), アカハラ(1), アカバラ(1), クチボソ(1)
タナゴ亜科	<i>Acheilognathinae</i> spp.	36	19.2	0.0	I :タナゴ(40), オシヤラク(6), フナ(6), アカベ(1), アカボ(1), ガンガラ(1), カンメンド(1), カンメンドウ(1), ザコ(1), ザッコ(1), タナゴ(1), タナンベ(1), チリメン(1), ニガ(12), ニガイ(1), ニガンベ(4), ニガンベ(1), ブナ(1), フナッコ(1), II :オシヤラクブナ(20), ニガブナ(9), オシヤラクニガ(6), チリメンザッコ(3), チリメンザコ(2), オシヤラクタナゴ(1), オシヤラクニガンベ(1), オシヤレブナ(1), オシヤラブナ(1), ニガザッコ(1), ニガブタ(1), ニガブタ(1), ニガリザコ(1), ニガリブナ(1), ヒラメンジャコ(1), ギンタロウブナ(1), III :アカベンケイ(1)
メダカ B	<i>Oryzias latipes</i>	55	5.4	0.0	I :メダ, メダカ, メダガ, メダカッコ, メダカメ, メダコ, メダタ, メダッカ, メザ, メザアカ, メザカ, メザガ, メザカッコ, メザツカ, メジャカ, コザッコ, ザコ, ザゴ, ザゴッコ, ザコッコ, ザコメ, ザコンベ, ザッコ, ザコッコ, ザッコメ, ボッコ, ウキコ, ウキゴ, ウキスコ, ウキッコ, ウキメ, ウキンザ, メザゴッコ, ウスボッコ, ウルコメ, ウルメコ, ギンメ, コメザ, コメッコ, コメラ, コメンコ, サカコ, ビラッコ, メダッコ, メンザクコ, メンザゴ, メンサラッコ, メンザラッコ, メンゾー, II :メザコ, メザゴ, メザッコ, ツンツンザコ, III :ハナウカシ, メザカナ

標準和名および学名は「とちぎの魚類(2001)」²²⁾に準じた。ただし、属名が変更したオイカワ、ギバチの学名は細谷 (2019)²¹⁾に準じた。

メダカAはアンケート調査結果を、メダカBは「メダカ方言」²³⁾に記述された魚名を用いた。

メダカBはアンケート調査によらないため、確認集落数を掲載していない。

Table 2 魚種別にみた基本部の分類と基本形の分布流域毎の回答集落数

Classification of the basic part and distribution of basic forms by river basin.

標準和名	基本形	回答集落数 (%)			合計
		那珂川水系 (59集落)	鬼怒川水系 (98集落)	利根川水系 (77集落)	
中央語					
ウグイ	ウグイ	1 (8)	5 (38)	7 (54)	13
ウナギ	ウナギ	35 (26)	61 (45)	40 (29)	136
オイカワ	オイカワ	4 (31)	4 (31)	5 (38)	13
	タナゴ	9 (47)	8 (42)	2 (11)	19
カジカ	カジカ	44 (29)	70 (46)	38 (25)	152
カマツカ	カマツカ	0 (0)	13 (65)	7 (35)	20
ギバチ	ギバチ	6 (43)	5 (36)	3 (21)	14
シマド'ジョウ	ドジョウ	2 (6)	13 (39)	18 (55)	33
スナヅメ	ウナギ	24 (28)	41 (48)	20 (23)	86
タナゴ亜科	タナゴ	5 (12)	19 (44)	19 (44)	43
	フナ	22 (51)	14 (33)	7 (16)	43
ドジョウ	ドジョウ	32 (23)	60 (43)	48 (34)	141
ナマズ	ナマズ	28 (21)	60 (45)	45 (34)	133
ニゴイ	コイ	5 (36)	4 (29)	5 (36)	14
フナ属	フナ	39 (22)	82 (46)	58 (32)	180
ホトケド'ジョウ	ドジョウ	5 (13)	14 (36)	20 (51)	39
メダカ	メダカ	26 (22)	49 (41)	43 (36)	119
ヤマメ	ヤマメ	47 (36)	56 (42)	29 (22)	132
地方語					
ア'ラハヤ	ザコ	33 (39)	46 (55)	5 (6)	84
	ニガ	12 (32)	17 (46)	8 (22)	37
	ハヤ	5 (15)	11 (33)	17 (52)	33
ウグイ	アイソ	37 (31)	53 (45)	28 (24)	118
	アカハラ	12 (46)	10 (38)	4 (15)	26
	ザコ	46 (40)	54 (47)	16 (14)	116
	ハヤ	3 (9)	11 (33)	19 (58)	33
	マルタ	0 (0)	6 (100)	0 (0)	6
	オイカワ	イカリ	21 (91)	2 (9)	0 (0)
	オシラカ	3 (43)	3 (43)	1 (14)	7
	ガンガラ	11 (12)	49 (52)	35 (37)	95
	ザコ	2 (22)	6 (67)	1 (11)	9
	ニガ	3 (38)	5 (63)	0 (0)	8
	ヤマベ	0 (0)	2 (25)	6 (75)	8
	カマツカ	スナ	4 (22)	9 (50)	5 (28)
	バカ	24 (65)	12 (32)	1 (3)	37
	ギンギョ	36 (30)	62 (52)	21 (18)	119
	ゲギョ	0 (0)	1 (13)	7 (88)	8
シマド'ジョウ	スナ	0 (0)	4 (44)	5 (56)	9
	スナサビ	29 (25)	71 (62)	14 (12)	114
	スナハビ	24 (75)	6 (19)	2 (6)	32
スナヅメ	ヤツメ	16 (20)	41 (51)	23 (29)	80
タナゴ亜科	オシラカ	1 (8)	12 (92)	0 (0)	13
	ザコ	1 (10)	3 (30)	6 (60)	10
	ニガ	3 (18)	13 (76)	1 (6)	17
ニゴイ	サイ	19 (46)	17 (41)	5 (12)	41
	セイ	0 (0)	9 (41)	13 (59)	22
ホトケド'ジョウ	ドンバラ	33 (100)	0 (0)	0 (0)	33
	ババ	14 (17)	58 (69)	12 (14)	84

凡例：回答集落数の割合

50%以上の場合

90%以上の場合

*確認集落数が5以上ある基本形のみを示し、4以下の基本形は除外した。

**標準和名および基本形の記述は50音順とした。

Fig.2 子供の用いる呼称, 対象魚の確認組織数の年平均値 (①) 及び宇都宮市内の30組織での確認個体数 (②)

Bar chart in names used by children and line chart of annual average of the number of settlements inhabited by the target fish (①) and number of confirmed individuals in Utsunomiya City (②).

Fig.3 中央語と地方語の数と自家消費率及び販売率

Bar chart in central and vernacular dialect and line chart of self-consumption rates (%) and sales rates (%) .

Fig.4 中央語のみを持つ魚種と地方語を持つ魚種の自家消費率および販売率の比較

Relationship between basic part and self-consumption rate.

Fig.5 修飾部の型別にみた自家消費率

Relationship between modifier type and self-consumption rate.

Table 3 確認された修飾部の型
Modifiers organized by type.

標準和名	自家消費率	真	偽	味	産称	生息環境	形態	婚姻色	体長・齢	不明
ウナギ	84.5%								ジネンジョ(1)、メソ(1)	
ドジョウ	80.8%								ライサマ(1)	マンガン(4)
ナマズ	80.0%								オオ(1)、サンサイ(3)、サンザイ(4)、サンゼイ(1)	
ウグイ	78.4%	ホン(13)						アカハラ(1)		アイソ(4)
シマドジョウ	72.2%					スナ(1)	シマ(13)、ゴマ(1)			
アブラハヤ	67.6%			ニガ(4)	シヨンベン(8)		アブラ(68)、ヤナギ(1)			
フナ属	64.4%	マ(7)					キ(2)、キン(11)、ギン(17)			
オイカワ	56.7%				バカ(2)			オシヤラク(13)、ジジ(3)、ジジンベ(1)、ジンベイ(1)、ダダボ(1)、ババ(1)		ガンガラ(1)
ホトケドジョウ	48.6%									ホトケ(16)、マンガン(2)
スナヤツメ	43.2%					スナ(1)	ヤツメ(86)			
ニゴイ	26.5%		ニ(9)、ニセ(1)							
タナゴ亜科	19.2%			ニガ(14)			ギンタロウ(1)	オシヤラク(30)、チリメン(5)		ヒラメン(1)
メダカ	5.4%						クロ(1)			

あった。以上から中央語は広範な魚種に確認され、地方語は確認された魚種に限られる一方で、地方語が確認された魚種では中央語よりも多くの呼称が見られる傾向が示された (Fig.3)。

続いて修飾部をみると、中央語では 82 の呼称のうち 38 呼称と 46% が類型 II、つまり中央語の約半数に修飾部が付随し、修飾部の多様さが中央語を基本部とする魚名の多様化につながっていると考えられた。一方、地方語では 176 の呼称のうち 34 呼称と修飾部が付随するのは 19% のみとなり、地方語の多様化には、中央語と比較して修飾部が付随する影響は大きくないと考えられた。

地方語と比して中央語で修飾部が付随し多様化する要因として次のことが考えられる。すなわち、種毎に異なる多様な魚名を持つ地方語は修飾部がなくても個別の種を指せる。一方、中央語では同じ中央語が複数の魚種に見られる場合がある。そのため、「真 (ホン、マ等、例えばマブナ)」に対し、「偽 (ニ、ニセ等、例えばニセゴイ)」あるいは「味 (ニガ、例えばニガブナ)」や「形態 (シマ、ゴマ等、例えばシマドジョウ、ゴマドジョウ)」、「婚姻色 (オシヤラク等、例えばオシヤラクブナ)」により同じ中央語を持つ魚種同士 (例えばマブナとオシヤラクブナなど) を区別する必要がある場合がある。また、同一種の中で「体長・齢」により修飾部が変化する例もウナギ、ドジョウ、ナマズの中央語のみを持つ 3 種に限定されている。これは、Fig.4 で示したように、中央語のみを持つ魚種は自家消費率および販売率が高く他魚種と比較し食に適した魚種であることから、「体長・齢」により、さらなる食への適性の高低を示している可能性があげられた。

4.1.2 基本部の多様性と分布流域との関係

水域毎の中央語・地方語の分布と 3 水系 (那珂川水系、鬼怒川水系、利根川水系) での各魚名の割合を (Table 2) に示した。これを見ると、地方語では、全 29 呼称のうち 23 呼称 (79%) では、全確認集落のうち 50% 以上が 1 つの水系で確認された。さらにそのうち 4 呼称 (マルタ、オシヤラク、ドンバラ、イカリ) では、全確認集落のうち 90% 以上が 1 つの水系で確認された。一方、同様の手法で中央語について検討したところ、18 呼称のうち 3 呼称 (17%) では、全確認集落のうち 50% 以上が 1 つの水系水系で確認されたが、90% 以上が 1 つの水系水系で確認された呼称はなかった。

以上から、中央語と比較し、地方語では水域毎に異なった魚名が見られる傾向が確認された。栃木県内全域を対象としてみた場合に地方語が多様となるのは、水系ごとに異なる魚名が残存しており、結果として栃木県内全域でみると多様な地方語が残されるものと推察された。

柳田国男は「蝸牛考」¹⁵⁾においてカタツムリの地方名を全国的に検討し、「中央で生まれた言葉が周囲に伝播する際、伝播の順番に従い、古い言葉ほど中央から離れた位置にまで到達する」ことにより多様な方言が生じるとの学説「方言圏論」を唱えた²⁴⁾。一方、金田一²⁴⁾はそのアンチテーゼ²⁴⁾として「各地の方言はそれぞれが孤立的に変化し、異なった姿を呈するようになる」という「孤立変遷論」を唱えた²⁴⁾。小林²⁴⁾は方言の/解明にはこの両論の融合が必要と考え、「方言形成における中央語の再生」についての論を提起している。

栃木県において、魚名のうち地方語が流域単位で異なったのも、柳田¹⁵⁾、金田一²⁸⁾、小林²⁴⁾らの唱えた要因による可能性がある。しかし、本研究は栃木県全域を対象としたものの、魚名の伝播や変異という視点でみるとより広い範囲での調査および検討が必要であり、全国規模の魚名の調査と解析が今後の課題として残された。

4.2 地方語から中央語への置換と魚名の統一化の要因

本研究では、中央語と比べ地方語を持つ魚種に多様な呼称があることを示した。一方で、中央語が使われることにより、地方語が激減していると考えられる例が確認された。前述の通り澁澤¹³⁾は「明治初年以来の初等教科書（国定教科書）」がメダカの魚名の統一につながったとしている。メダカ A で 3 呼称、メダカ B で 55 呼称と大幅な呼称の減少がみられた。

他の中央語が地方語から置換されたものかは現時点では不明である。本研究からは、中央語のみの魚種は地方語を持つ魚種と比較し自家消費率および販売率がそれぞれ高い傾向が明らかとなった（Fig.4）。中央語のみを持つ魚種としては、ウナギ、ドジョウ、ナマズ、フナとなる。これらの種は何れも販売率の上位 5 魚種に含まれる。こうした状況を踏まえると、販売、つまり流通により地方語が中央語へと置換された可能性があげられる。魚類ではないが、安室²⁹⁾はアワビの呼称が流通を通じ、商品として消費者に誤解のないよう、より汎用性のある分類・命名に統一される傾向を指摘している。ただし、栃木県における魚名が広範な種に対し残されている江戸期の史料「産物書上帳」では、1730 年代に多くの魚種ですでに現在と同じ呼称であることが明らかとなっており³⁰⁾、本研究の対象となる魚種では 7 種（ウナギ、カマツカ、ドジョウ、ナマズ、フナ、タナゴ、カジカ）は 1730 年代にすでに中央語が使われている。したがって、これらの魚種の魚名が地方語から中央語へ置換していたとしても、少なくとも 1730 年代より以前に起きていたこととなる。

一方で、地方語を持つ魚種を見ても、販売率だけでな

く、自家消費率にも相関関係を持つ現象がみられた（Fig.3）。このことは、流通を通さずとも、淡水魚の自家消費等の利用により魚名の統一の影響が生じている可能性を示すと考えられる。経済社会学者である渡植³¹⁾は、前近代社会や地域社会では経済活動は商品経済的活動として他の社会活動と分化せず、非商品経済的活動としてほかの社会活動と一体化しているとしている。さらに、一般商品の生産、特に農産物など自家用の労働生産物の余剰が商品となる場合などは、「その生産も消費も商品経済の中に半ば入りこんでいるにすぎない」としている。渡植の視点を引継いだ内山³²⁾は、こうした商品を「半商品」として紹介している。水田漁撈は専業の漁師ではなく農民により行われ⁸⁾、販売率の高い魚種でも自家消費率もまた高い（Fig.3）ことから、多くの場合、獲れた魚は商品として流通せず、自家消費されと考えられる。流通を通さずとも魚名の統一とみられる現象が生じていることは、渡植³¹⁾のいう「非商品経済的活動」においても安室²⁹⁾がいう「汎用性のある分類・命名」への統一が生じている可能性が考えられる。

なお、メダカで起きたような中央語を用いることで地方語が減少する事例は今後も生じる可能性がある。現代では、地域住民が標準和名にふれる機会は多くある。例えば、栃木県では多面的機能支払制度において「生きもの調査」が広く取り組まれている³³⁾。こうした際に、様々な魚類や水辺の生物の図鑑が用いられ、生きもの調査に参加するアドバイザーも生物種の解説で標準和名を用いることが多い。

4.3 修飾部の多様化の要因

修飾部について、それぞれの分類（真、偽、味、蔑称、生息環境、形態、婚姻色、体長・齢）を持つ魚種の自家消費率を Table 3 に示した。分類別にみると、真と体長・齢で自家消費率が高い値を示した（Fig.5）。

「体長・齢」については、ウナギ、ドジョウ、ナマズの自家消費率や販売率の高い魚種で見られた（Table 3）。そのため、「体長・齢」は好んで利用されたウナギ、ドジョウ、ナマズでは食に適していることがわかる体長や齢に関する修飾部が発達したと考えられた。

以上の考察をもとに、修飾部のうち、食に適していることを表していると考えられる分類（真、体長・齢）と食に適していないことを表していると考えられる分類の魚種の中で、より大型で可食部の多くなる個体に付随する分類（偽、味、蔑称）をまとめて両群の自家消費率について比較をしたところ、有意な差が見られた（Fig.5, ウェルチの t 検定, $P < 0.01$ ）。したがって、修飾部の一部に食の適不適に関する要素が含まれており、食の対象

と結びついた呼称となっていると考えられた。

食の適不適の対象に含まれない「生息環境」、「形態」、「婚姻色」の各型について見ると、自家消費率が高い種（ウナギ、ドジョウ、ナマズ）とニゴイを除く幅広い魚種で確認された。「生息環境」、「形態」、「婚姻色」の各型を持つ魚種には、例えばウグイやフナなど、「真」の修飾部を持つ魚種も含まれた。以上のことから、「生息環境」、「形態」、「婚姻色」の修飾部は、食の適不適にかかわらず用いられるものである可能性が挙げられた。

4.4 魚名の多様化要因と継承する意義

本研究では、魚名を分類し、基本部と修飾部に分割して、そのうえで基本部に地方語を持つ魚種の魚名が豊富であること、地方語は流域単位に異なることから栃木県全域でみると魚名が豊富になることを示した。また、中央語は前置して付随する修飾部が利用との関係により多様化し、中央語を基本部とする魚名を豊富にしていることを明らかにした。以上のように、地域に残された魚名は流域という空間的な広がり、利用という人との関わりの中で魚名が多様化することが明らかとなった。

以上を踏まえると、地域に残された魚名を継承することには、第一に地域の特異性を守る意義、第二に水田漁撈という農村の文化を蓄積してきた歴史を守る意義の2つが指摘される。前者については、本研究では流域毎に異なる魚名が用いられており、地域の独自性を形作る重要な要素と考えられる。後者については、稲作とともに長く日本の農村を支えてきた水田漁撈の歴史が魚名のうち、特に修飾部に残されており、地域の歴史を伝え行くために重要な要素となると考えられる。

4.5 魚名の継承の可能性と伝わりやすい条件

地域に残された魚名を次世代に残せるか、本研究では、第2回のアンケート調査時に、「子供のもちいる呼称」を調査項目として設けた。アンケートの結果からは、図鑑の名前と同様となる中央語のみを持つ魚種を除いた11種および1分類群のすべてで6割以上の回答者が地元の名前もしくは地元の名前と図鑑の名前の両者を用いていると回答している。特に、ホトケドジョウ、ギパチ、ウグイ、シマドジョウでは8割以上の回答者が地元の名前もしくは地元の名前と図鑑の名前の両者を用いていると回答している。したがって、現状では地域の次世代を担う子供たちに地元の名前、つまり集落に残された魚名が伝わっていると考えられる。

続いて、「地元の名前」が次世代に伝わりやすい条件を明らかにするために、魚種毎の①対象魚種の確認組織数、②宇都宮市内の多面組織（30組織）における「生

きもの調査（2015年）」での確認個体数の平均値、の各数値について、地元の名前もしくは地元の名前と図鑑の名前の両方を選択した割合（%）との相関関係（スピアマンの順位相関係数）の関係を調べたところ、それぞれの間で相関関係が確認された（Fig.2）。確認地点数が多く、確認個体数の平均値が高い魚種は、生きもの調査等で比較的高頻度に捕獲される魚種であると考えられる。したがって、両数値が高い魚種はより確認が容易な種と考えられ、こうした種の方が、地元の名前を継承しやすいと考えられた。以上から、地域の魚名を次世代に伝えていくためには、集落内において対象となる魚種が生息し、かつ生息数も豊富な状態を維持することが好ましいと考えられた。水田水域の魚類を保全する取り組みや技術開発は全国的に取り組まれており、こうした取り組みが魚名を含めた生物文化多様性の保全に寄与するものと期待される。

4.6 環境教育や地域活動による魚名継承の可能性

地域に残された魚名はメダカの例に見るように、地方語が中央語へと置き換わり消失する可能性がある。今後、地域に残された魚名をどのように地域の次世代に伝えてゆけるだろうか。

魚名の継承の前提として、農村に魚が数多く棲む状態とする必要がある。続いて、人が魚を捕る、つまり「人と魚の関わり」が可能である必要がある。さらに、魚とりの方法や魚名を伝える関係性、つまり「人と人の関わり」が必要となる。こうした「関わり」を構築する機会の一つとして、環境教育がある。加納³⁴⁾は、農村地域における環境教育のひとつである「田んぼの学校」について、「いくつかの活動主体は、活動フィールドとなる農村の環境（自然や文化、暮らし、それを守り繋いできた知恵や技）について」の取り組みを通じ、活動フィールドとする場の環境特性などへの理解を深めることを報告している。「田んぼの学校」を始めとする農村地域における環境教育活動は、「人と魚の関わり」と「人と人の関わり」を実現しうる取り組みとして期待される。

さらに、「人と魚の関わり」と「人と人の関わり」についての直接的な取り組みに「生きもの調査」がある。宮元³⁵⁾は、「田んぼの学校」の活動実態と特性を解析し、「自然観察（51%）」や「田んぼまわりの生き物調査（48%）」が多くのグループで取り組まれていることを明らかにしている。多面組織における「生きもの調査」も重要な取り組みと考えられる。栃木県で「生きもの調査」を実施した多面組織（375組織）を対象に水谷ら³³⁾が実施したアンケートでは、「生きもの調査を契機とした地域の変化」として回答数の多い順に「子どもたちが生き

ものを意識するようになった」,「世代を超えた幅広い交流ができた」,「生きものに関する共通認識が醸成された」が挙げられ,「人と魚の関わり」と「人と人の関わり」を持つ機会が「生きもの調査」により創出されていることがうかがえる。

一方,「生きもの調査」については,地域特有の魚名を標準和名に置換してしまう可能性もある。そのため,栃木県内で行われてきた「田んぼの学校」と「生きもの調査」の実例³⁶⁾を基に,地域住民の生物分類技能を活用した「生きもの調査」のプログラムが提案されている³⁷⁾。こうした取り組みを踏まえ,例えば栃木県では,多面組織が「生きもの調査」に取り組む際,調査結果を基に「調査結果について考え,話し合う」ことが推奨され,「話し合いの項目の例」として「生きものの地方名や通称など」が挙げられてきた。

今後,「生きもの調査」に取り組むには,地域特有の魚名を意識的に次世代に伝える仕組み作りが重要となるであろう。

さらに,地域活動の一環として水田漁撈が復活する事例もある。安室³⁸⁾は,1990年代にワイズユース(wise use)のような環境思想と連動し,自然をめぐる民俗技術が注目されるようになったことを指摘している。さらに,地域振興のイベントで水田漁撈が復活する事例が全国的に広がっていることを報告している³⁸⁾。例えば,茨城県つくばみらい市の寺畑地区では,「クミッケ」と呼ばれるカイボリ漁が地域活動の一環として復活³⁹⁾,地域住民が東京から参加する子供達に魚とりや魚名などを教えている。

こうした「田んぼの学校」を始めとする環境教育や「生きもの調査」,「地域活動」などを通じて,地域に残されてきた魚名が今後も継承されることが期待される。

謝辞

本研究は科学研究費補助金(基盤研究C 19K06290)の支援により実施された。また,栃木県内の多面的機能支払活動組織の構成員の皆様および栃木県土地改良事業団体連合会の皆様をはじめ,多くの方々に本研究のアンケート調査に御協力いただいた。記して感謝の意を表する。

引用文献

- 1) Convention on Biological Diversity (参照 2020.9.28): List of Parties, (オンライン), 入手先<<https://www.cbd.int/information/parties.shtml>>
- 2) 環境省(2010)(参照 2021.1.15): SATOYAMA イニシアティブ—自然共生社会の実現を目指して—, (オンライン), 入手先<https://www.env.go.jp/nature/satoyama/pamph/j_satoyama_initiative_pamph.pdf>
- 3) 環境省(2008)(参照 2020.8.31): 多様な生きものと人々の暮らしを支える水田, (オンライン), 入手先<<http://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/ricpaddy/jap.pdf>>
- 4) Convention on Biological Diversity (2010)(参照 2020.9.28): Linking Biological and Cultural Diversity-UNESCO-SCBD Programme, (オンライン), 入手先<<https://www.cbd.int/portals/culturaldiversity/docs/Flyer-CulturalDiversity.pdf>>
- 5) 武内和彦(2016): 日本における世界農業遺産(GIAHS)の意義, 農村計画学会誌, 35(3), 353-356.
- 6) 石毛直道・ケネス ラドル(1990): 『魚醬とナレズシの研究—モンスーン・アジアの食事文化』, 岩波書店, 東京.
- 7) 加藤潤・中島香子・水谷正一(1999): 場と主体の変化から見た農村部における魚とりの変遷過程—栃木県西鬼怒川地区を事例として, 農村計画学会誌, 18(1), 43-54.
- 8) 安室知(2005): 『水田漁撈の研究—稲作と漁撈の複合生業論』, 慶友社, 東京.
- 9) 文化庁(1995)(参照 2020.8.31): 新しい時代に応じた国語施策について(審議経過報告), (オンライン), 入手先<https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/ka-kuki/20/tosin02/index.html>
- 10) 佐藤亮一(2015): 『滅びゆく日本の方言』, 新日本出版社, 東京.
- 11) 文化庁(参照 2020.8.31): ユネスコが認定した, 日本における危機言語・方言の分布図, (オンライン), 入手先<https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/pdf/bunpuzu.pdf>
- 12) 高橋そよ(2014): 魚名からみる自然認識—沖縄・伊良部島の素潜り漁師の事例から, 地域研究, 13, 67-94.
- 13) 澁澤敬三(1959): 『日本魚名の研究』, 角川書店, 東京.
- 14) 鈴野藤夫(2000): 『魚名文化圏 イワナ編』, 東京書籍, 東京.
- 15) 柳田國男(1930): 『蝸牛考』, 刀江書店, 東京. (岩波文庫 1980による)
- 16) 柴田武(1958): 『日本の方言』, 岩波書店, 東京.
- 17) 徳川宗賢(1979): 『日本の方言地図』, 中央公論新社, 東京.
- 18) 西端幸雄(1985): 琵琶湖沿岸漁村方言調査・中間報告: 湖東・湖北地方の魚名称について, 樟蔭国文学, 22, 39-49.
- 19) 農林水産省(2015)(参照 2020.8.31): 多面的機能支払交付金の概要, (オンライン), 入手先<https://www.maff.go.jp/j/nousin/kanri/tamen_siharai/n_sansya/attach/pdf/2kai-4.pdf>
- 20) 宇佐美伸之介・守山拓弥・田村孝浩(2016): 宇都宮市北部における昭和30年代頃の魚類の生息情報の把握, 平成28年度農業農村工学会全国大会講演要旨集, 339-340.
- 21) 細谷和海(2019): 『山溪ハンディ図鑑 増補改訂 日本の淡水魚』, 山と溪谷社, 東京.
- 22) 栃木県(2001): 『とちぎの魚類』, 栃木県林務部自然環境課, 栃木.
- 23) 辛川十歩・柴田武(1980): 『メダカの方言—5,000の変種とその分布』, 未央社, 東京.
- 24) 小林隆(2008): 方言の形成における中央語の再生(小林隆・木部暢子・高橋顕志・安部清哉・熊谷康雄, 『シリーズ方言学1 方言の形成』), 岩波書店, 東京, 1-42.
- 25) 栃木県農地水多面的機能保全推進協議会(参照 2020.8.31): 田んぼまわりの生きもの調査報告書, (オンライン), 入手先<<http://www.tegnouchimizu.net/ikimono.html>>
- 26) 森下喜一(2010): 『改定増補 栃木県方言辞典』, 随想舎, 栃木.
- 27) 盛永俊太郎・安田健(1985): 『享保・元文諸国産物帳集成 第Ⅱ巻 常陸・下野・武蔵・伊豆七島』, 科学書院, 東京.
- 28) 金田一春彦(1953): 辺境地方のことばは果たして古いか, 言語生活, 17. (『日本語方言の研究』東京堂出版(東京)に再録)
- 29) 安室知(2014): 再考, 魚名の研究—アワビの民俗分類と商業論理(自然と技の生活誌)—(生活環境史の試み), 国立歴史民俗博物館研究報告, 181, 165-204.

- 30) 守山拓弥・守山弘 (2016) : 産物書上帳記載の魚名を基にした近世農民の魚種識別知識の検討, 農村計画学会誌, 34 (4), 453-460.
- 31) 渡植彦太郎 (1986) : 『仕事が暮らしをこわすー使用価値の崩壊』, 農山漁村文化協会, 東京.
- 32) 内山節 (2006) : 『『創造的である』ということ〈下〉地域の作法から』, 農山漁村文化協会, 東京.
- 33) 水谷正一・南斎好伸・小堀忠則 (2012) : 非農家や子どもたちが参加する生きもの調査の取組みと成果, 農業農村工学会誌, 80 (1), 11-14.
- 34) 加納麻紀子・宮元均・水谷正一 (2008) : 「田んぼの学校」活動の環境教育的意義, 農村計画学会誌, 27 (3), 119-124.
- 35) 宮元均・加納麻紀子・水谷正一 (2006) : 水田, 水路などを活用した「田んぼの学校」の活動実態と特性, 農村計画学会誌, 25, 275-280.
- 36) 守山拓弥, 北澤大佑, 田村孝浩 (2010) : 西鬼怒川地区の事例に見る農村地域の環境保全へ果たす NPO 法人の役割, 農業農村工学会誌, 78 (10), 831-834.
- 37) 守山拓弥 (2009) : 地域住民の生物分類技能を活用した「生きもの調査」の視点, 平成 21 年度農業農村工学会全国大会講演要旨集, 80 (3), 138-139.
- 38) 安室知 (2005) : 水田漁撈と現代社会ー環境思想とフォークロリズムの交錯 (共同研究 環境利用システムの多様性と生活世界), 国立歴史民俗博物館研究報告, 123, 49-83.
- 39) 守山拓弥, 小菅新一, 守山弘 (2012) : 寺畑地区の事例にみる都市農村交流による水利施設の利用・管理の取組み, 農業農村工学会誌, 80 (3), 173-176.

(2020.11.3 受理, 2021.3.19 採用)